



ISSN 0917-4729

北方民族博物館だより

No.76



HA216 二段バスケット 直径.33.0cm ×高さ.4.9cm
ナーナイ ロシア／ハバロフスク地方 K. ホジェル 1978年製作

アムール川流域に暮らすナーナイやウリチでは白樺樹皮を使った容器のほか、物をいれたり、イクラなどを干したりするバスケットを作っていた。この資料は二段になったバスケットであるが、製作者はかつては四段のものを作ることができたという。

- 1 表紙 ヤナギ製二段バスケット
- 2-3 企画展 カナダの民話をみる
- 3-4 講習会 版画で伝えるメッセージ／北海道博物館紀行「美幌博物館」
- 5 企画展「カムチャツカ調査の10年」／サハ調査報告
- 6 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

企画展

カナダの民話をみる極北の イヌイト・アートを中心に

2010.2.6-4.11

企画展が始まって1週間後に、バンクーバー・オリンピックが開幕しました。開会式では、先住民族の存在が強くアピールされたと言ってよいと思います。カナダには多様な先住民がおり、その文化が復興されてきています。言語をはじめ、儀式、舞踊、生活技術など、内容は多岐にわたりますが、特に経済活動に結びつくものとして、工芸品の製作も盛んです。なかでも、極北地域にいらしてきたイヌイトの版画や彫刻、壁掛けは、アートとしても高く評価されています。

本展は、すべて当館が所蔵する資料で構成しました。自然のなかで生活してきた人びとが、語り伝えてきた祖先の物語をテーマにした作品とともに、映像資料等も展示しました。以下に概略を紹介します。

カナダの先住民

最初に、カナダ先住民の概要を紹介しました。カナダでは、先住民を大きくインディアン（ファースト・ネーションズ／約70万人）、イヌイト（イヌイットと表記されることもある／約5万人）、メイティ（カナダ先住民と初期のヨーロッパからの交易者や植民者との間に生まれた人びとの子孫／約39万人）と分けており、先住民全体の数は国の人口3375万人の3%あまりとなっています。

イヌイト以外の先住民の多くは、出身地を離れ、都市などで生活を営んでいます。展示では、亜極北地域のヘヤー（カショーゴティネ）、北西海岸地域のハイダヤヌートカ（ヌー・チャー・ヌルス）、東部森林地域のイロクオイやミクマックなど、イヌイト以外の民族の具体例も紹介しました。

イヌイトについて

イヌイトは、「エスキモー」と呼ばれてきた人びとのうち、現在のカナダに住む人たちの自称（「人びと」の意味）です。「エスキモー」はシベリアからアラスカ、カナダ、グリーンランドの極北地域に住む人びとを指す総称として今でも使われていますが、カナダでは1970年代以降「イヌイト」が用いられるようになりました。

カナダの都市部から遠い極北にすすイヌイトは、20世紀前半まで狩猟や漁労を中心とした生活を営んでいました。しかし、第二次世界大戦後、定住化や学校教育などの普及により、その生活は急激な変化を余儀なくされました。

かつて実際に使用された生活用具は常設展示していますので、企画展では、伝統的な道具類としてイヌ櫓やカヤッ

クあるいは狩猟具の模型など、工芸品または子ども向けの教材用に作られたものを展示しました。

イヌイト・アート

1940年代末に、トロント出身のカナダ人芸術家ジェームズ・ヒューストンはイヌイトの彫刻の商品価値を見出し、市場に売り出すことに成功しました。イヌイトにとって彫刻は、現金を得る手段の一つとなり、短期間のうちに多くの村で制作が行なわれるようになりました。彫刻の素材は、オイルランプ（灯火皿）に用いられてきた軟らかな滑石（ソープストーン）や蛇紋岩が多く、そのほか動物の骨・角・牙^{きば}なども使われます。



1950年代末には、版画の制作も始められ、彫刻とならんでカナダのイヌイト・アートを代表するものになりました。その後、アップリケや刺繍^{ししゅう}・手織りの壁掛けなども制作されるようになり、これらのイヌイト・アートは美術市場でも評価を得て、経済的にも精神的にもイヌイトの生活を支えるものとなりました。

こうした歴史やバリエーションをパネルや映像で紹介したうえで、作品のテーマとしてよく取り上げられる「キヴィックの冒険」や「シャマン」などについて解説も付しました。そのうち、海の生物を支配する女性は、セドナ（タレーラユあるいはヌリアユクなど）と呼ばれ、イヌイトの説話の中でよく知られているものの一つです。物語には若干内容の異なるものもありますが、大筋は以下のとおりです。

ある娘が、急ぐ船から海へ投げこまれた。彼女は船の縁をつかんだが、乗っている人から指を切り落とされた。彼女は海底に沈み、海の精霊になった。その指からは、海獣類が生まれた。人間がタブーなどを犯すと、彼女は怒ってアザラシなどを隠してしまう。そうしたとき、シャマンは海底に行き、彼女をなだめて、再び獲物をよこしてくれるように頼むのである。

セドナは上半身が人間、下半身が魚（海獣）という「人魚」のような姿で描かれます。展示では壁掛けや彫刻で紹介しました。

さらに、カナダ国立映画制作庁が1980年に制作した「イヌイトの伝説と生活」(原題: Legends and Life of the Inuit)の中から、以下の3つの話を一部日本語字幕付き



で上映しています。最初の2話は、アザラシ毛皮製のぬいぐるみによる、3話目は版画によるいずれもアニメーションで、イヌイト語のせりふや歌が織り込まれた楽しい作品です。以下はあらすじです。

<第1話 フクロウとレミング (タビネズミ)>

おながが空いたフクロウがレミングをとらえた。しかし、レミングに「すばらしいハンターだ」「おどりもうまい」などとおだてられ、調子によっておどっているうちに、にげられてしまう。

<第2話 フクロウとワタリガラス>

むかし、フクロウとワタリガラスは仲がよかった。ワタリガラスはフクロウの羽に模様をかけた。つぎにフクロウが模様をつけはじめたが、ワタリガラスがじっとしていないので、おこって墨の入ったバケツをなげつけた。以来、ワタリガラスは黒くなったのだ。

<第3話 ルマークの伝説>

目の見えない少年が、母と妹とくらしていた。母親は少年に冷たく、ろくに食べ物もあたえなかった。ある年の春、少年はわたり鳥のアビに目をなおしてもらったが、見えないふりをしていた。母と海岸に行った少年は、いちばん大きなシロイルカをしとめた。銚の綱を体にむすんでいた母親は、海の中に引きずり込まれた…。

イヌイト・アートでは、民話をモチーフとしたものばかりではなく、定住化する以前のテントやイグルー(雪の家)での暮らし、狩猟や漁労など生業のようすもよく描かれます。助け合いや食べ物の分かち合いといった社会関係、母と子をはじめとする家族のきずなも、好まれる主題です。こうした伝統的な暮らしをテーマとした作品は、外部の人びとから「イヌイトらしい」ものとして評価されました。伝統的な生業の一部は今でも行なわれており、アート作品の収入は、ライフル銃の弾丸やスノーモービルの燃料などを購入する資金ともなっています。

イヌイトたちは20世紀半ばに現金を手に入れる必要に迫られ、自立を支援するカナダ政府をはじめとするさまざ

まな機関や人々の協力を得て、アート制作が始まりました。今日のイヌイト・アートは、彼らが極北に生きる誇りを表し、それを次世代に伝える手段として、重要な役割を果たしています。

イヌイトのみならず、カナダの多くの先住民が、失われた祖先からの物語を掘りおこし、生きるための知恵を伝えようとしています。本企画展は小規模なものですが、展示されている作品から、それらが少しでも伝われば、嬉しいことです。

最後に、展示に際しては岸上伸啓氏と大村敬一氏より写真や情報提供のご協力をいただき、カナダ大使館からはご後援をいただきました。また、博物館実務実習の大学生4名に展示作業に加わっていただきました。記して感謝申し上げます。

(学芸グループ 齋藤玲子)

企画展関連講習会

版画で伝えるメッセージ

「初級編 ～ステンシルでアート」

「上級編 ～木版画で絵手紙」

2010.2.6

講師 田主 誠氏(版画家)

企画展の初日、午前と午後の2回に分け、技法の異なる2種類の版画の講習会を開催しました。講師には、版画家であり、かつて国立民族学博物館に勤務され、現在も同館共同研究員として、イヌイトや北西海岸インディアンの版画作品を多くご覧になってきた田主先生をお招きしました。以下にその概要を紹介します。

<ステンシルでアート！>

ステンシルは「型染」「合羽版」などと訳される技法で、厚紙などをくりぬいた型を用いて色をつけるものです。イヌイトの版画でもよく使われる技法の一つで、ステンシル作品には、明るくやわらかなイメージのものが多いようです。

講習会では、小学低学年の子供でもできるようにカッター・ナイフのみではなくハサミも用意し、デザインの見本もつけました。今回は型紙に専門のステンシルシートを使いましたが、厚手のトレーシングペーパーや製図フィルムなどの水をはじく紙やフィルムといった入手しやすい材料で代用することができます。また、着色する際のブラシは、メイク用スポンジの安価なものを割り箸の先に輪ゴムでくくりつけて作りました。講習会ではアクリル絵具を使いましたが、小学校で使うようなふつうの水彩絵具でも十分です。

参加者22名は、それぞれ好きなデザインをステンシルシー

トに写しとり、慎重に切っていました。そして、はがきや画用紙でつくったカードなどに刷りあげました。

また、和紙輸出業の（株）森木ペーパーからイヌイト・アートで使われているものと同じ大判の和紙を提供いただき、それぞれが作った型で寄せ書きのように大きな作品を作りました。田主先生が、波の模様などを入れてくださいました。

<木版で絵手紙>

イヌイトに彫刻や版画を指導したカナダ人芸術家のJ. ヒューストンは、1957～58年に来日し、木版画家の大家・平塚運一氏の下で版画の技術を学びました。イヌイトの住む地域には大きな木は育ちませんから、ヒューストンは“版木”に石を用いるなどの工夫をしました。原画・版木彫刻・刷りを分業とする浮世絵のシステムを導入し、作家の落款を押すなど、日本の方法も取り入れられています。

参加者は、こうした解説を受けながら実際のイヌイトの作品を鑑賞した後、講師の見本作品を参考に、思い思いの絵を版木に描き、彫刻に取り組みました。絵柄は、イヌイト・アートに良く描かれるホッキョクグマやカリブーなどの動物、展示作品をスケッチしたもの、当館のロビーに展示しているマンモスなどを選ぶ方が多くいました。田主先生には彫刻刀の扱いから、どの部分を彫れば効果的かなど丁寧に指導いただきました。また、版は1版ですが、油性インクを何色か混ぜてグラデーションにするなど、これもイヌイト風の刷り方で、鮮やかな絵はがきができました。

2時間半ほどですべての参加者が作品を刷りあげ、田主先生から講評していただきました。これらの作品は、企画展の期間中、展示しています。

(学芸グループ 齋藤 玲子)



北海道博物館紀行

美幌博物館

2009.1.10

講師 尾崎 絵美氏（美幌博物館）



「北海道博物館紀行」は、道内の博物館を紹介するもので、今回は美幌博物館を紹介しました。美幌博物館は「河川と人」をテーマに美幌の自然や歴史、文化を紹介するとともに、自然観察や物作り、季節の行事を主催するなど、教育普及活動にも力を入れている博物館です。今回は同博物館人気メニューのひとつ、スノードーム作りの指導を尾崎さんをお願いしました。

スノードームは、雪が降ったように見える置物です。まず、粘土をこねて、空きビンの中に入れる部品を作ります。参加者の皆さんは魚や、熊、雪だるまなどを思い思いに作っていました。出来上がった粘土細工は130度の温度に設定したオーブンで約30分かけて焼きました。こうすることで、空きビンの中に入れる溶液に粘土が溶けなくなります。

オーブンで粘土を焼いている間、ビンの栓を発泡スチロールで作ります。これはスノードームを作る上で、一番重要な作業になります。ビンと発泡スチロールの間にすき間があるとそこから液体が漏れてしまうからです。ビンの栓ができあがると、今度はビンの中に白砂、ラメ、水、液体用洗濯のりを入れます。ポイントは水と洗濯のりの割合です。水が多いと、白砂やラメがビンの中で早く動き、洗濯のりを多くすると、ゆっくりと動きます。白砂は雪を表すので、多いとビンをつったら吹雪になってしまいます。参加者の皆さんは、何度も水と洗濯のりの分量を調節していました。最後にオーブンから焼けた粘土細工を取り出し、少し冷ましてから発泡スチロールに固定し、ビンにはめ込んで完成です。

事業時間の2時間はあっという間に過ぎ、30分も延長してしまいましたが、講師の尾崎さんは最後まで親切に指導くださり、全員がオリジナルのスノードームを完成させることができました。

(学芸グループ 角 達之助)

企画展

「カムチャツカ先住民調査の10年」

2009.10.31-12.13

私は1997年以来10年にわたってカムチャツカの先住民文化にかんする調査を行ってきました。その内容はイテリメンやコリヤーク、エベンなどの狩猟、漁撈、採集、トナカイ遊牧といった伝統的な経済活動やそれらにかかわる儀礼などの精神文化、さらにかつて行われた北洋漁業に伴う日本人漁業者と先住民との文化接触について、あるいは現代の先住民社会に対する政治・経済体制の影響や先住民文化のあり方など多岐にわたっています。

本企画展は調査にかかわって撮影した写真が中心になりました。自然風景、植物、街や村の情景、市場、食卓、建物、交通手段、狩猟や漁撈、トナカイ遊牧、人物などA3サイズにプリントした写真約200枚を展示しました。

これに加えてコリヤークの衣類、漁労具（箱罟、魚止め柵、鉤鉚の先）、民族文化にかかわる土産品、地図、書籍など実物も展示しました。

また、サケ漁やトナカイ遊牧、インタビューに関する映像を3ヶ所のモニターでご覧いただきました。

多数の写真によって伝統的な文化からカムチャツカの現在の生活まで幅広く紹介することができたと考えています。

35日間の会期で1360名の観覧者にご覧いただくことができました。なお、関連事業として展示解説会「企画展ギャラリー・トーク」を11月1日（日）に実施し、さらに11月7日（土）にはカムチャツカの先住民から伝授されたサケ入り餃子を作って試食する学芸員講座「サケ餃子づくり」を実施しました。

（学芸グループ 渡部 裕）



ギャラリートークの様子

2009年度調査報告

「サハ共和国・トンポ地区におけるエベンのトナカイ牧畜について」

2009.7.26-8.31

昨年度より、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」に共同研究者として参加しています。私自身のテーマは、温暖化がトナカイ牧畜に及ぼす影響の評価です。今年度は、最初の現地調査として、ロシア連邦サハ共和国のトンポ地区にあるトナカイ遊牧キャンプに行ってきました。



トナカイの駆り集め作業の様子

サハ共和国の中心都市ヤクーツクから調査地までは、約800kmの道のりです。このキャンプでは、2家族10名がパラートカ（ロシア式テント）に寝泊りしながら、約1000頭のトナカイを飼育しているとのことでした。ただ、この時期は好物のキノコを捜してトナカイが散らばってしまうらしく、一度に確認できるのはせいぜい300頭程度でした。

日常的なトナカイの管理は、群が分散しないようにパラートカ周辺に留めておくという作業が中心でした。普段、トナカイ群は、パラートカの近くで休んだり、餌を食べたりしているのですが、時に移動を始めるのです。一部のトナカイには鈴が付けられているため、人はその音を頼りにトナカイの動きを察知して、群をふたたびパラートカの近くに戻します。その際には、騎乗用トナカイにまたがり、トナカイを駆り集めるのです。トナカイの鞍の形や乗り方は、馬とはずいぶん違っていています。牧羊犬ならぬ牧トナカイ犬を使っているのも印象的でした。

調査はまだ始まったばかりですが、これまでほとんど紹介されてこなかったこの地域のトナカイ牧畜について、現地で確認することができたのは収穫でした。プロジェクトはあと4年間続く予定ですので、今後、彼らのトナカイ管理の実態をより詳細に把握し、地球温暖化がどのように影響するかを明らかにしていきたいと考えています。

（学芸グループ 中田 篤）

平成22年度の主なもよおし

保苅実写真展 カントリーに呼ばれて
オーストラリア・アボリジニと
ラディカル・オーラル・ヒストリー
平成22年4月29日～6月20日（無料）

第25回特別展 「北方民族の衣の世界」（仮称）
平成22年7月17日～10月17日（有料）

第25回北方民族文化シンポジウム
現代社会と先住民文化
ー観光・芸術から考えるー2
平成22年10月16日～17日

モンゴルの伝統文様と切り絵（仮称）
平成22年10月30日～12月19日（無料）

池田カナ子 シベリア・サハ共和国 写真展（仮称）
平成23年1月8日～1月23日（無料）

研究紀要19号

岡正雄先生の北方研究：その軌跡と業績（岡田淳子）
大地とのつながりを求めて（2）アラスカ州ロシアン
ミッション村、地域文化と伝統を折り込んだ教育
課程（高野孝子）

コリャーク語の-Nvoが表す始動アスペクトと習
慣アスペクト（呉人恵）

ベレストロイカ以降のカムチャツカの先住民社会
（渡部裕）

"明治時代の網走の暮らし"とアイヌ：小学社会科
のための素材さがし（齋藤玲子）

<調査報告>夏営地におけるツァータンのトナカ
イ放牧活動（中田篤）

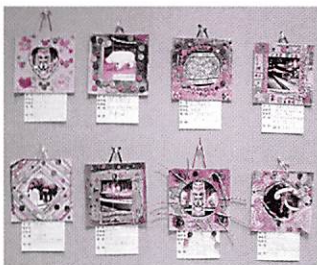
北海道立北方民族博物館所蔵のウイльта資料Ⅰ：
対応する北方言の語彙を中心に（1）（山田祥子・
笹倉いる美）

のるりすと2009：北方研究データベース（笹倉
いる美）

INFORMATION

ミュージアム・スクール

財団法人山田青少年育成財団（網
走市）の援助をいただき、ミュージ
アム・スクールを開催しました。小
学校での講座と博物館での来館学習
がセットになっています。来館学習
の成果はロビーに展示しました。初
年度は、網走市の東小学校、白鳥台
小学校、西が丘小学校が参加しまし
た。



行事報告

◆11月7日～11月29日の会期で「ロ
ビー展縄文土偶国宝指定記念：北海
道土偶名品選」を開催しました。

◆12月19日にはくぶつかんクラブ「ト
ナカイのキーホルダー作り」（講師：
中尾亜未解説員）を開催しました。

◆12月24日に札幌交響楽団員によ
る「ロビーコンサート～青少年のた
めの室内楽の夕べ」を開催しました。

◆1月16日にはくぶつかんクラブ
「フェルトでモビール作り」（講師：
石原生久代解説員）を開催しました。

◆2月10日に楽しいゲームとスノー
シュー おいしいアイスも作れる
よ！（講師：金一哲也・熱海桂子
常呂少年自然の家社会教育主事、菅
原章子当館解説員）を北海道立常呂
少年自然の家との共催で開催しました。

◆2月14日に「企画展解説会」（担
当：齋藤玲子主任学芸員）を開催し
ました。

◆2月27日にはくぶつかんクラブ「イ
ヌイト風かべかけをつくろう」（講
師：日比野美保解説員）を開催しま
した。

◆2月27日に「バルト海とオホー
ツク海～雪氷の変化と地球環境～」
（講師：マッティ・レップランタ ヘル
シンキ大学物理学部教授、ナビゲー
ター：白澤邦男 北海道大学低温科
学研究所環オホーツク観測研究セン
ター准教授）を常呂少年自然の家と
の共催で開催しました。

◆3月12日に講習会「北方民族の
手芸 インディアンのかぶつ細工」
（講師：笹倉いる美学芸員）を開催
しました。

北方民族博物館だより No. 76

平成22(2010)年3月31日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

財団法人北方文化振興協会